

学校適応感を高める不登校の未然防止の在り方

― 授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導とSEL－8Sの取組を通して ―

廿日市市立佐伯中学校 秋本 摂子

研究の要約

本研究は、中学校における学校適応感を高める不登校未然防止の在り方を追究したものである。文献研究から、不登校の要因・背景について明らかにし、生徒の学校適応感を高める学習的適応と対人的適応の両方を促進する取組が不登校未然防止につながると考えた。そこで、生徒の学習的適応を促進するための授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導と対人的適応を促進するための社会的能力の育成に焦点を当てたSEL－8Sの取組を合わせ、不登校未然防止プログラムを開発、実施した。その結果、不登校傾向生徒を含む全ての生徒の学習的適応と対人的適応が促進され、生徒が学校生活に適応していると主観的に感じる学校適応感に高まりが見られた。このことから、授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導とSEL－8Sの取組の両方を行うことは、不登校傾向生徒を含む全ての生徒の学校適応感を高めることに有効性があることが示唆された。

キーワード：学校適応感 アセス 授業のユニバーサルデザイン化 SEL－8S

I 問題の所在

文部科学省が平成27年12月に発表した「学校基本調査（確定値）」によると、全国の不登校児童生徒数は、小学校25,864人、中学校96,786人で、全児童生徒数に占める割合はいずれも前年度より増加し、小学校は0.39%、中学校は2.76%である。

広島県教育委員会による「平成26年度の広島県における生徒指導上の諸問題の現状(速報)」については、不登校児童数は715人で前年度より71人増加し、割合は0.47%で全国割合を上回っている。次に、中学校の不登校生徒数は2,019人で前年度より34人増加し、割合は2.52%で全国割合を下回るものの、近年の減少傾向が増加に転じている。

これらの不登校児童生徒数の増加は、全国・県ともに全児童生徒数が減少する中での事態であり、依然として深刻な状況である。

国立教育政策研究所（平成24年）が示した「不登校・長期欠席を減らそうとしている教育委員会に役立つ施策に関するQ&A」では、不登校相当と準不登校の基準を表1のように示している。

この基準を基に、本研究では、欠席日数が30日を超える生徒を不登校生徒とし、これらを除く表1に該当する不登校相当、準不登校の生徒を不登校傾向生徒と呼ぶこととする。

表1 「不登校相当」・「準不登校」の基準¹⁾

欠席日数＋保健室等登校日数＋（遅刻早退日数÷2）	
「不登校相当」	30日以上
「準不登校」	15日以上30日未満

所属校は自然豊かな山間部に位置し、220人の生徒が在籍している。平成27年度第1学期の欠席、遅刻、早退、保健室登校等の日数から、不登校相当、準不登校の生徒を算出したところ、不登校生徒0.9%、不登校相当2.7%、準不登校3.2%であった。これらの不登校傾向生徒がこのまま不登校になった場合、不登校生徒数の割合は6.8%になると予想され、所属校においても不登校の状況は極めて重要な課題であり、より積極的な取組が必要と考える。

II 研究の基本的な考え方

1 不登校の要因・背景

不登校に関する調査研究協力者会議（平成27年）は、不登校の要因・背景について、本人、家庭、学校に関わる様々な要因が複雑に絡み合っている場合が多く、その背景として、社会における学校の相対的な位置付けや、学校に対する保護者・児童生徒の意識の変化等、社会全体の変化の影響力が存在していると示している。また、児童生徒が不登校となる

要因やきっかけは様々であり、不登校状態が長引くほど、時間の経過とともに不登校要因は変化し、解決の困難度を増していくと示している。さらに、不登校との関連で新たに指摘されている課題として、児童生徒が周囲と人間関係をうまく構築できない、学習のつまずきが克服できない、といった状況が進み、不登校に至る事例が少なくないと示している。

これらのことから、不登校の要因・背景は、単一に特定されるものではなく、変化しながら複雑に重なり合って生じることを踏まえ、生徒が不登校になる以前の、より早い段階での方策が必要と考える。

2 不登校の未然防止について

小林正幸（2009）は、「学校が居心地がよく、そこにいるだけで幸せな気分になるような場ならば、不登校は起きない。」²⁾と述べている。

また菅野純（2008）は、友だちと一緒に遊んだり一緒に何か取り組んだりすることによって自己を発揮する体験をプラスの学校体験とし、登校行動が持続するための条件と述べている。

さらに、国立教育政策研究所（平成26年）は「生徒指導リーフ Leaf.14 不登校の予防」において、社会の変化を前提として、特定の生徒を想定せず、全ての生徒を対象とした、学校を休みたいと思わせない授業や行事等の工夫や改善の必要性を示している。

これらのことから、不登校の未然防止として、全ての生徒にとって学校が居心地がよいと感じられるように、人間関係の構築や授業等の工夫や改善をしていくことが必要と考える。

3 学校適応感とは

栗原慎二（2010）は、学校適応感について、生徒一人一人が主観的に学校生活の中でうまくやっていると感じている程度を示すものと述べている。

また石井眞治（2009）は、適応とは、人間が社会や組織の中で適切な対人関係と心理的な安定を保ちながら組織が求める行動がとれている状態とし、そうした力が身に付いていなければ、不適応の状態になると述べている。

さらに、国立教育政策研究所（平成20年）が示した「適応感を高める高校づくり」では、学校側の働き掛けや取組が、生徒の学校への適応感を高め、不登校傾向や学力に問題のある生徒も含めて不登校を未然に防止する手立てになると示唆している。

これらのことから、学校適応感とは、生徒が主観

的に学校生活の中で友だちや集団と安心して過ごすことができている、自分らしさを発揮できていると感じることであり、生徒の学校適応感を高める取組が不登校の未然防止につながると考える。

4 所属校の実態分析と取組の方向性

(1) アセスメントとその方法

文部科学省（平成22年）は「生徒指導提要」（以下、「提要」とする。）において、アセスメントを「見立て」とも言い、生徒の示す行動の背景や要因を、情報を収集して系統的に分析し、明らかにしようとするものと示している。また、アセスメントを行うに当たっては、校内で組織的に対応することの重要性も示している。

次に、学校環境適応感尺度「アセス（ASSESS：Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres）」は、学校環境に関連した「学習的適応」と「対人的適応（教師サポート、友人サポート、向社会的スキル、非侵害的關係）」、家庭や地域等、学校以外の影響も反映する「生活満足感」の三つの観点から学校適応感を捉えることができるアセスメントツールである。このツールを活用することで、学級全体、あるいは個々の生徒への指導・支援の手掛かりを得ることができ、特に個別の指導・支援を必要とする生徒については、詳細にその実態を把握することができる。

これらのことから、アセスは、学級全体と不登校傾向生徒への指導・支援の方策を構築するのに適していると考える。

(2) アセスによる所属校の実態分析と取組の方向性

廿日市市では、平成26年度から市立小中学校でアセスを年間3回実施している。本研究では、平成27年6月22日実施のアセスの結果を基に、所属校の実態分析を行った。その結果と取組の方向性について図1に示す。

図1に示すアセスの結果から、所属校には、不登校生徒、別室登校生徒だけでなく、教室に位置付いている生徒の中にも、学校不適応を起こす可能性のある生徒がいることが分かった。これらの生徒を全て合わせると、全校生徒の4分の1以上の学校適応感が低いという実態が判明した。また、不登校傾向生徒は、全学年ともアセスの6因子全てが学年平均を下回っており、学校適応感が低いことが確認できた。さらに、不登校傾向生徒の生活満足感は、全ての学年で他の因子と比べて特に低い結果であった。

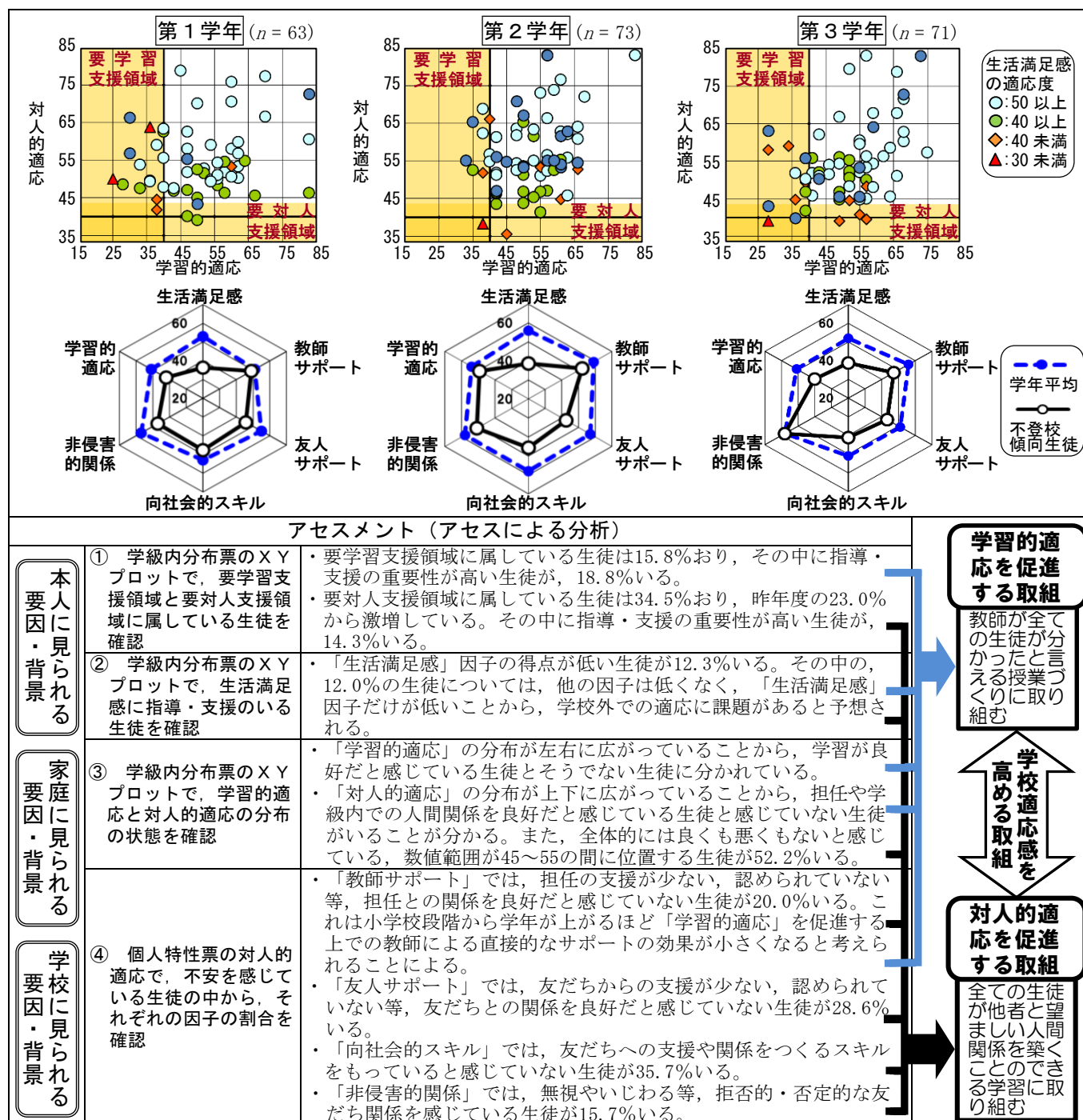


図1 アセスによる所属校の実態分析及取組の方向性

栗原（2010）は、学校適応感とは学校での適応感と学校以外での適応感を把握することが重要であり、その両方を反映した生活全体に対する総合的な適応感を生活満足感とし、他の5因子全てと高い相関をもっていると述べている。

すなわち、生活満足感が低い生徒の中には、学校外での適応に課題があると予想される生徒のほか、学習的適応（学習方法が分かり、意欲も高い等、学習が良好だと感じている）と対人的適応（他者との関係が良好である、他者との関係をつくるスキルを

もっていると感じている）のどちらか、あるいは両方に指導・支援を必要とする生徒がいると考えられる。したがって、生徒の学校適応感を高めるためには、生活満足感を改善するよう、他の5因子を高めていく取組が必要と考える。

これらのことから、不登校傾向生徒及び学校不適応を起こす可能性のあるアセス要支援生徒を含む全ての生徒の学校適応感を高めるためには、学習的適応と対人的適応の両方を促進する取組を進めていく必要があると考える。

5 学校適応感を高める取組

(1) 学習的適応を促進する取組

生徒の学習的適応を促進するためには、学校生活の中心である授業において、生徒が主観的に適応していると感じる必要がある。そのために、全教科担任が各自の持ち味を生かしながら、指導・支援の工夫や配慮のある授業づくりが重要だと考える。

東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会 with 小貫悟 (2010) は、「クラスの中のすべての子にとって分かりやすい対応を工夫しよう」³⁾ という授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教育を実践している。この教育では「すべての子にとって、参加しやすい学校を作り、分かりやすい授業をする」⁴⁾ ことを意識的に行うことが、学校における教師の教育活動において重要であると述べている。

また小林 (2013) は、不登校発生の減少や不登校問題の解消には、教師が子供に関わる際の支援方法やそれに関連する態度に係る意識の変化が極めて重要であるとし、教師の役割の重要性を述べている。

これらのことから、教師が全ての生徒に分かった、できた、楽しいを実感させることのできる授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った授業づくりを行うことは、教師が生徒に関わる際の意識を高め、生徒の学習的適応を促進するための教師の具体的対応としての指導・支援になると考える。

ア 授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導チェックシートと教師の自己評価・生徒の自己評価

小貫ら (2010) は、授業のユニバーサルデザイン化の視点を基に「ひのスタンダード」を策定し、通常学級におけるチェックリストを作成している⁽¹⁾。

本研究においては、このチェックリストを基に、図2のチェックシートを作成した。これを用いて、教師には自らの授業に対する自己評価を、生徒には授業についての自己評価及び自分にとって教師の指導・支援が有効であるかの見取りを目的とし、教師と生徒の両方の立場から見取りができるよう、表現を変えても同じ内容を問うように項目を対にして並べている。平成27年6月30日に実施した、教師の自己評価と生徒の自己評価の結果を図2に示す。

集計結果から、アセス要支援生徒の自己評価の回答値の平均は、全項目において学年平均より下回っていた。また、4月から6月末の不登校傾向生徒の自己評価の回答値の平均は、全校生徒、アセス要支援生徒よりもさらに低いことから、不登校傾向生徒は、学習的適応が低い傾向にあることが分かった。

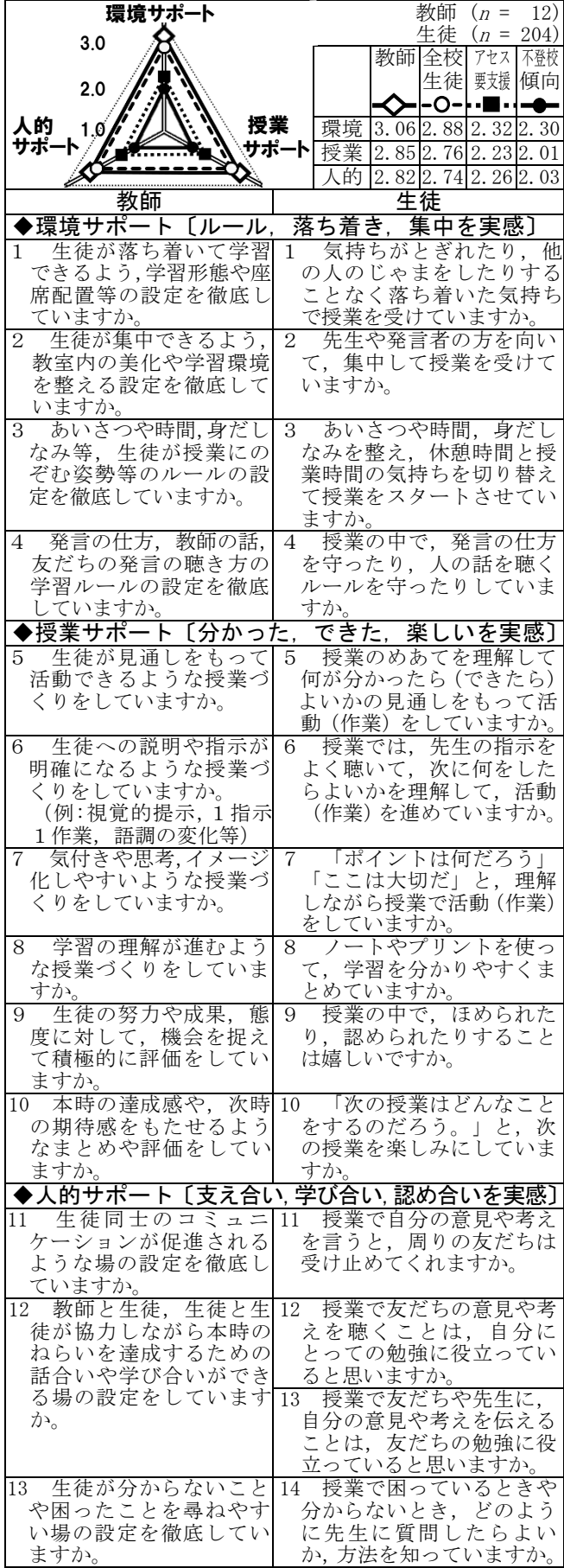


図2 授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導チェックシートと評価

イ 授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った授業モデル

チェックシートで明らかになった、教師からの指導・支援の特に低い項目を表2に示す。

表2 教師からの指導・支援の低い項目

授業	・本時のねらいを達成するための話合いや学び合いができる場の設定 ・本時の学習の達成感や次時の学習への期待感をもたせるまとめや評価 ・生徒の努力や成果、態度への積極的な評価
人的	・生徒が分からないことや困ったことを尋ねやすい場の設定

これらを基に全教科共通の授業づくりの工夫や改善のために作成した、本研究で扱う授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った1時間の授業モデルを図3に示す。

この図3に示す授業モデルを実践できれば、教師の指導・支援が進み、生徒の学習が良好に向かうことにより、生徒が「分かった、楽しい」と実感し、生徒一人一人の学習の適応が促進されて学校適応感が高まり、不登校の未然防止につながると考える。

(2) 対人的適応を促進する取組

生徒の対人的適応を促進するためには、他者との関わりの中で、生徒が主観的に適応していると感じる必要がある。そのために、学校生活や日常生活における様々な場面で生じる問題に対して、生徒が自信をもって適切な行動を選択し実行する意欲や能力を身に付けることが重要だと考える。

「提要」には、現代の児童生徒の問題行動の心理環境的背景として、社会的能力の未学習、あるいは適切な習得がないまま誤った対応を身に付けた状態があることを挙げ、周囲の人々や集団と良好な人間関係を築く方法や態度を身に付けることの重要性が示されている。

また小泉令三(2011)は、不登校を含む問題行動への対応には、周囲の人々や集団と良好な関係や関わりをもつ力が重要であるとし、これを社会的能力と述べている。

これらのことから、生徒が、社会生活において自分の力を発揮しながら、周囲の人々や集団と良好な人間関係を築く力を身に付けるために、社会的能力を育てるSEL-8Sの活用が有効と考える。

授業の流れ		授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導チェックシート	教師の指導・支援(例)
事前	授業のねらいとする力について、学級全体と、個への対応をするための準備	☐ 生徒が落ち着いて学習できるよう、教室内美化や整理整頓の指導・支援をしている。 ☐ 生徒が集中できるよう、座席配置等の指導・支援をしている。 ☐ あいさつや時間、身だしなみ等、生徒が授業にのぞむ姿勢のルールへの指導・支援をしている。	・教室内の美化や道具の整理整頓に努め、視覚の氾濫、聴覚のノイズを減らす。 ・本時のねらいにおける生徒の力について、記号等(◎, ○, ▲等)を記入した座席表の準備をする。 ・号令の掛け方、あいさつの仕方、身だしなみのチェック等の言葉掛けをする。
	授業のスタートをそろえ、見通しをもたせるための指導・支援	☐ 生徒が見通しをもって活動できるような授業のスタートの指導・支援をしている。	・めあての明確化、授業の流れを視覚提示する。 ・授業の流れをある程度パターン化する。 ・ゴールの分かりやすい、ノートやワークシート等による学習を進める。
展開	本時の学習のねらいを達成するための話合いや、学び合いができる場の設定、小集団の活用における指導・支援	☐ 生徒への説明や伝達が明確になるような分かりやすい指示の指導・支援をしている。 ☐ 生徒の気付きや思考がイメージ化しやすいような指導・支援をしている。 ☐ 生徒の学習の理解が進むような指導・支援をしている。 ☐ 発言の仕方や、教師の話、友だちの発言の聴き方等の学習ルールへの指導・支援をしている。 ☐ 教師と生徒、生徒と生徒のコミュニケーションが、授業の中で促進されるような場の設定の指導・支援をしている。	・短く分かりやすい言葉による説明をする。(1指示1作業、変化のある語調等) ・丁寧な板書、黑板上の文字量の調整、色チョークや下線等の板書のルールを決める。 ・写真や実物教材の提示、ICTを活用する。 ・語呂合わせやネーミングで、具体的な表現に置き換えた、目指す生徒像のスタイルを示す。 ・机間指導で教師からの適切な言葉掛けをする。 ・個⇒ペア、個⇒班⇒全体等の、小集団を活用した学習形態を取り入れ、役割をもたせた活動や全員発表の場を設定する。
	学習の達成感、次時の学習の期待感をもたせるまとめや、評価における指導・支援	☐ 本時の学習の達成感や、次時の学習の期待感をもたせるようなまとめや評価への指導・支援をしている。 ☐ 生徒が質問しやすい場を設定している。 ☐ 生徒の努力や成果、態度への積極的な肯定的評価をしている。	・座席記録で授業の実態を把握し、意図的指名で学習をまとめさせる。 ・互いのよさや頑張りを確認し合わせる。 ・実生活との結び付きに気付かせる。 ・余韻をもたせる終わり方の工夫をする。 ・受容的な態度で接する。
事後	生徒の姿容に対する肯定的な評価や称賛		・学習成果物の掲示や展示をする。 ・生徒の振り返りや学習カードを活用する。 ・個別の助言で次時のスタートをそろえさせる。

図3 授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った授業モデル(全教科共通)

ア SEL－8 Sの社会的能力に係る生徒の自己評価と教師評定

SELは、欧米諸国で広く実践され重要性が認識されている数多くの心理教育プログラムの総称である。このうちSEL－8 S (Social and Emotional Learning of 8 Abilities at the School) は、日本語名を「学校における八つの社会的能力育成のための社会性と情動の学習」という。

小泉（2014）は、生徒の社会的能力を偏差値で示している。偏差値40～60を平均的な状態、60以上を高い状態、40未満を低い状態とし、平均より低い状態の生徒は、注意が必要であると述べている。

平成27年6月22日に実施した、社会的能力に係る生徒の自己評価と、各学年3人ずつによる教師評定の結果を図4・5に示す。

生徒の自己評価の結果から、社会的能力が身に付いていないと感じている生徒は、第1学年83.9%、第2学年64.9%、第3学年68.1%であった。このうちアセス要支援生徒は、全ての観点で学年平均を下回っていた。また、不登校傾向生徒の「人生の重要事態に対処する能力」は、全学年で他の項目と比べて八角形の凹みが大きく、平均は、学年平均、アセス要支援生徒よりも低いことから、不登校傾向生徒は、社会的能力が低い傾向にあることが分かった。

さらに教師評定は、第1・2学年では全ての観点で生徒の自己評価よりも高く、第3学年では低かった。この差は、教師の行動観察からは測定できない生徒の主観的な感じ方の表れであると考えられる。

このように、生徒と教師それぞれの自己評価を比

較して分析することで、課題となる生徒の能力や特徴、教師の指導の留意点を明らかにできる。これは、個別の指導・支援が必要な生徒にも、学級全体にも、より具体的で効果的な指導方法の工夫として生かせるものと考えられる。

イ 社会的能力を育てるSEL－8 Sの取組

小泉（2015）は、SEL－8 Sの指導の留意点として、八つの社会的能力のうち弱い能力だけに特化するのではなく、8能力全てに取り組むことで、全体のバランスの取れた生徒が増えると述べている。

所属校では、事前アンケートで明らかになった不登校傾向生徒の特徴である「人生の重要事態に対処する能力」の弱さに着目しながら、8能力全てがバランスよく高まるように構成し、第2学期に実施する指導計画を作成した。これを図6に示す。

この指導計画は特別活動の授業に限定せず、身に付けた能力をさらに強くする「強化」の活動として、授業で扱ったSEL－8 Sのポスターの掲示や帰りの会等でのショートエクササイズを取り入れている。本研究では、これらのSEL－8 Sの授業とショートエクササイズを合わせたものをSEL－8 Sの取組と呼ぶこととする。また、学習したSEL－8 Sの能力を、授業以外でも広く使えるよう、社会的能力の「般化」の場面となる学校行事や活動を挙げている。

以上の考えを基に、SEL－8 Sの取組を行うことで全ての生徒の社会的能力が向上し、生徒一人一人の対人的適応が促進されて学校適応感が高まり、不登校の未然防止につながると考える。

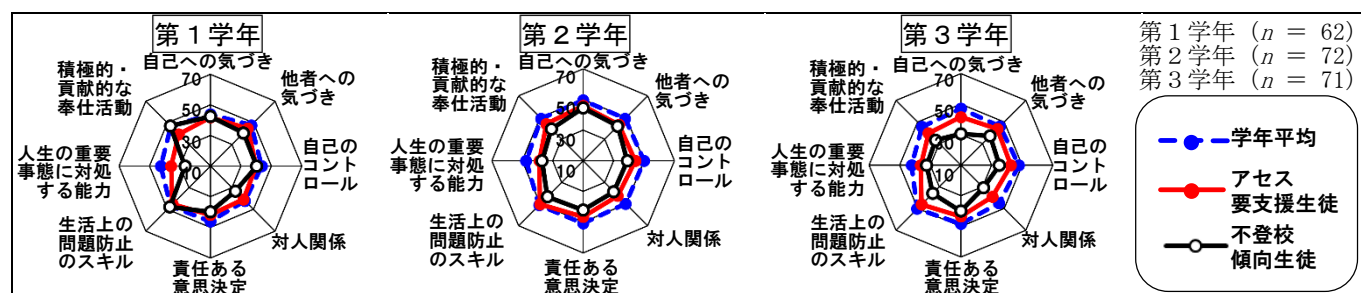


図4 社会的能力に係る生徒の自己評価（偏差値）

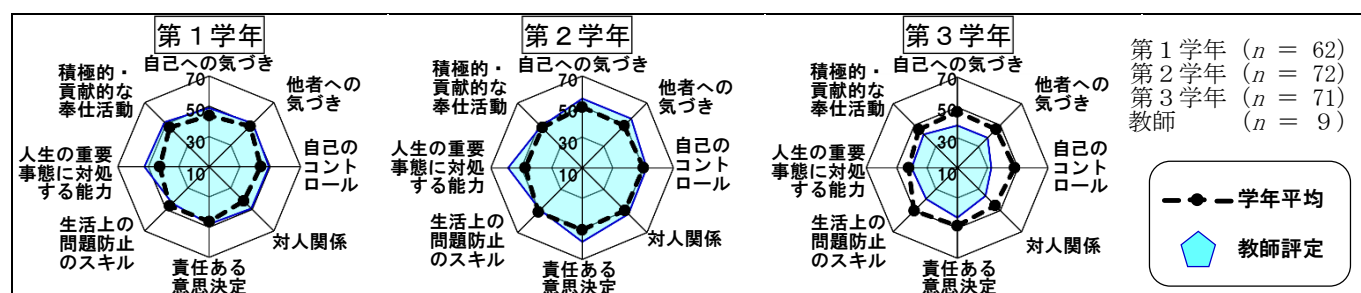


図5 教師評定（偏差値）による生徒の社会的能力

時	ねらいとする社会的能力							題材名	目 標	帰りの会（ショート エクササイズ）での 社会的能力の強化	学校行事・ 活動等での 社会的能力 の般化	
	基礎的			応用的								
	自己への気づき	他者への気づき	自己のコントロール	対人関係	責任ある意思決定	生活上の問題防止のスキル	積極的・貢献的な奉仕活動					
事前	事前アンケートに回答し、望ましい人間関係を築いていこうとする社会的能力を高めていくことを意識する。											
第1時	○	◎	◎	◎				第1学年	「自分の特徴をよく知ろう①」	自分の長所や短所に気づき、自己理解を深める。	自分グラフ 自分コマーシャル ・友だちからのプラスのフィードバックにより見方を変えて自分を客観視させる。 「『自分CM』を作成しよう。」	☆学級開き ☆部活集会 ⇒ ☆面接練習 ☆定期テストへの取組
								第2学年	「自分の特徴をよく知ろう②」	また、自分の短所の克服に建設的に取り組む方法を知る。		
									第3学年	「自分の特徴をよく知ろう③」		
第2時			◎	◎	◎	◎		第1学年	「はっきり断ろう①」	ネガティブに捉えがちな「断る」という行為は他者との良好な関係を維持する上で重要な行動の一つであることに気付く。	アサーショントレーニング ・適切な自己表現の仕方と、相手に伝わりやすい伝え方を身に付けさせる。 「テーマを決めて班員とペアトークをしましょう。」 断るのはこわー ハリのワニ ・適切な断り方の定着を図る。 ・SEI-8Sポスターを教室掲示する。	☆授業における、話し合い活動・ペアトーク ⇒ ☆防犯教室 ☆縦割り掃除の集会 ☆長期休業中の生活
			○	○	◎	◎	○	第2学年	「はっきり断ろう②」	また、必要な場面で断るスキルを身に付ける。		
			◎	○	◎	◎	◎	第3学年	「危険な状況での断り方」	さらに、危険な状況においても断る意思をもち、誘われても断るスキルを身に付ける。		
第3時		○		○	○		◎	第1学年	「学校でのミニボラ」	自分がやるべきことや、果たすべき責任の範囲で積極的に役割を果たすこともボランティアと位置付け、学校のちょっとした場面でボランティアができることに気付く。	ボランティアパスポート ・一定期間のボランティアを記録させ、ボランティアに対する意欲付けを図る。 「自分が今まで以上に進んでできそうな仕事や役割を考え、記録しましょう。」 ・一定期間を区切りとして「継続か」「別のことにするか」を選択させる。	☆つながりを深めるデー ☆縦割り掃除 ☆大掃除 ⇒ ☆学校行事・運動会・文化祭・合唱祭・球技大会・生徒総会・挨拶運動
								第2学年	「学校でのミニボラ」	また、地域においても家庭や学校と同様に小さな活動でも直接的・間接的に自分が役立つ一員であるという意識を高める。		
								第3学年	「地域ボランティア」	また、地域においても家庭や学校と同様に小さな活動でも直接的・間接的に自分が役立つ一員であるという意識を高める。		
第4時	◎		○				◎	第1学年	「私の夢」	自分の弱さや困難への対処法について知り、自己理解を深め、自分の特徴を基に、将来や夢について考える。	ストレスマネジメント ・自分でできるちょっとしたストレス対処法を身に付けさせる。 「心と体を落ち着かせる呼吸法と筋弛緩法を体験しよう。」 レジリエンスレッスン ・困難な事態にも前向きに対処する方法を身に付けさせる。 「1週間を振り返り、困難をうまく乗り越えられたことを記録しよう。」	☆定期テストへの取組 ☆中体連等壮行式 ⇒ ☆キャリアスタートウィーク ☆駅伝・マラソン大会
	◎				○		◎	第2学年	「夢への挑戦」	また、自分の夢に向かって、進路に係る目標を設定し、今の生活を充実させていこうとする意識を高める。		
	◎		○		◎		◎	第3学年	「自分を見つめて」	さらに、目標達成に向けて困難な事態にも前向きに挑戦する意欲をもつ。		
第5時	◎	◎	○	◎			○	第1学年	「長所を生かそう①」	自分の長所に目を向け、改めて自己理解を深める。	ほっとHotホットメール ・身近な人との関わりや支えに対し、感謝の気持ちを伝える意欲付けをする。 「友だちへほっとメールを送りましょう。」 友だちコマーシャル ・友だちから自分のPRをしてもらうことで、自分のよさに改めて気付かせる。 「『友だちCM』を作成しよう。」	☆3年生を送る会 ⇒ ☆鍋給食会 ☆卒業式 ☆離任式 ☆学級卒業式
								第2学年	「長所を生かそう②」	また、自分の長所を強みとして、進んで自分の力を発揮しようと努力する意識を高める。		
								第3学年	「長所を生かそう③」	さらに、自分の長所を生かし、余力を他人のために使おうとする意欲をもつ。		
事後	事後アンケートに回答し、望ましい人間関係を築いていこうとする社会的能力について、振り返りと自己評価を行う。											

図6 社会的能力を育てるSEL-8Sの取組

(3) 不登校未然防止プログラム

これまで述べたように、生徒の学校適応感を高めるために、学習的適応を促進する取組として授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導を行うとともに、対人的適応を促進する取組としてSEL-8Sの取組を行う。すなわち、教師が授業のユニバーサルデザイン化の視点に立ち、SEL-8Sの取組を行うことは、安心した学習環境の中で活動に取り組み、学級の全ての生徒にSEL-8Sの能力を身に付けられたと実感させることができるため、生徒の学習的適応を促進しながら対人的適応が促進され则认为。また、生徒が身に付けたSEL-8Sの社会的能力を教科の授業で活用することは、友だちとの関わりの中で思考が深まり、気付きや学びを得られて目標を達成できるため、生徒の対人的適応を促進しながら学習的適応が促進され则认为。

したがって、授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導とSEL-8Sの取組を行うことで、生徒の学習的適応と対人的適応が同時に促進され、生徒の学校適応感を高めることにつながると考え、不登校未然防止プログラムを作成した。

Ⅲ 研究の目的

本研究は、教師の授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導と生徒の社会的能力を育てるSEL-8Sの取組を通して、生徒の学校適応感を高める不登校の未然防止の在り方を追究することを目的とする。研究の構想図を図7示す。

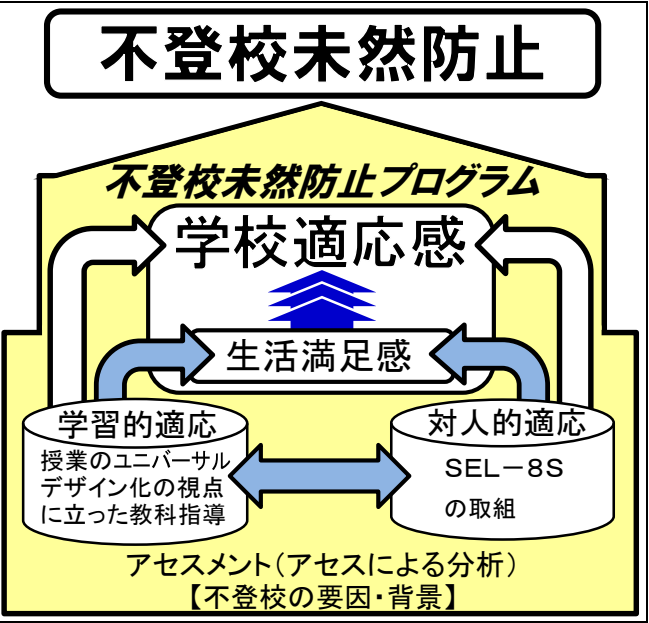


図7 本研究の構想図

Ⅳ 研究の仮説と検証の視点・方法

1 研究の仮説

授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導とSEL-8Sの取組を行えば、不登校傾向生徒を含む全ての生徒の学習的適応と対人的適応が促進されて学校適応感が高まり、不登校の未然防止につながるであろう。

2 検証の視点・方法

検証の視点と方法について、表3に示す。

表3 本研究の検証の視点・方法	
○検証の視点	
授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導とSEL-8Sの取組により、生徒の学校適応感を高めることができたか。	
○検証の方法	
◆アセスの事前・事後調査 ・「学習的適応」「教師サポート」「友人サポート」「向社会的スキル」「非侵害的関係」「生活満足感」の6因子全34項目から、学校適応感について測定する。	
調査方法	質問紙を用いた5段階評定尺度法
対 象	全校生徒220人
実 施 日	廿日市市で実施する年間3回のうち、第1回目、第2回目の実施計画に合わせて実施 事 前 平成27年6月22日 事 後 平成27年11月30日
分析方法	研究授業前後の各学年生徒と不登校傾向生徒の偏差値の平均値を比較
◆授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導に係る事前・事後調査 ・「環境サポート」「授業サポート」「人的サポート」の3因子、教師全13項目、生徒全14項目から、学校適応感の学習的適応について測定する。	
調査方法	質問紙を用いた4段階評定尺度法
対 象	全校生徒220人 教師12人
実 施 日	事 前 平成27年6月30日 事 後 平成27年11月30日
分析方法	研究授業前後の各学年生徒と不登校傾向生徒の回答値の平均値を比較
◆SEL-8Sの社会的能力に係る事前・事後調査 ・「自己への気づき」「他者への気づき」「自己のコントロール」「対人関係」「責任ある意思決定」「生活上の問題防止のスキル」「人生の重要事態に対処する能力」「積極的・貢献的な奉仕活動」の8因子全26項目から、学校適応感の対人的適応について測定する。	
調査方法	生徒…「学校生活についてのアンケート」 質問紙を用いた4段階評定尺度法 教師…「SELの8つの社会的能力」 質問紙を用いた5段階評定尺度法
対 象	全校生徒220人 教師9人（各学年教師3人ずつ）
実 施 日	事 前 平成27年6月22日 直 前 平成27年9月8日（生徒のみ） 事 後 平成27年11月30日 強化後 平成27年12月21日（生徒のみ）
分析方法	研究授業前後の全校生徒と不登校傾向生徒の偏差値の平均値及び教師の偏差値の平均値を比較

V 研究授業

1 授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導の実施

(1) 実施計画

- 期 間 平成27年9月～11月
- 対 象 全校生徒220人，教師12人
- 方 法

8月に所外研修で校内研修会を設定し，事前調査のチェックシートを基にした授業のユニバーサルデザイン化に係る授業モデルの実施について，教師の共通理解を図る。9月から全教科で，授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導に係る全教科共通の授業モデルを実施する。

(2) 授業モデルを活用した指導・支援の工夫

各教科担任が，授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導を意識して行えるよう，全教科共通の指導・支援として，図3の授業モデルを示す。また，各教科の授業観察や聞き取りを行った指導・支援の工夫例をまとめ，教科間で交流する。

(3) 授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った各教科の指導・支援の工夫例と生活の中にあるユニバーサルデザイン化の工夫例

所属校において，授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った全教科共通の授業モデルと各教科の取組を実施した。各教科の指導・支援例と合わせ，学校生活の中にあるユニバーサルデザイン化についてまとめた指導・支援の工夫例の一部を表4に示す。

表4 授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った各教科の指導・支援の工夫例と生活の中にあるユニバーサルデザイン化の工夫例の一部 【☆全体への指導・支援の工夫例 ★個への指導・支援の工夫例】

国語	ノートの構造化	☆ノートの3分割で，使い方・書き方・学習のルールを徹底させる。 （【上段:予習…意味や読み】【中段:本時…板書】【下段:復習…家庭学習，感想，メモ等】）
	暗唱学習	☆ポケットサイズのチェックカードを準備し，いつでも暗唱テストにチャレンジさせることで，何度でも「できた」の成功体験につなげる。 ★暗唱サイズを分割し，スモールステップで達成を促す。
社会	資料の見方や活用	☆ICTを活用し，生徒の興味・関心を高めるよう，地形図の拡大表示等の教材提示をする。 ★ポインターを使って操作することで，机間指導しながら生徒席付近での説明や指示をする。
	単元の構造化	☆単元の全体像を示してゴールを明らかにし，毎時間の授業を進める。 ★机間指導の際の言葉掛けを重視し，指導・支援を要しない活動に関しては，積極的な言葉掛けはせず，指導・支援の強弱を付ける。
数学	既習事項の活用	☆ICTを活用して既習事項を示すことで自力解決を促す。提示された既習事項はプリントアウトして黒板に掲示し，必要に応じてヒントとして選択させる。掲示プリントは，それ自体が区切られた枠内を見る配慮となつて，注目度が高まる。 ☆数学科教室に解き方のポイントや公式，既習事項を掲示する。視覚刺激軽減のため教室背面のみに掲示する。
	空白時間の排除	☆授業終了を待ち時間とさせず，進んで練習問題に取り組みさせることで，普段から自分の勉強方法を工夫することに価値を置く指導とする。 ★練習問題に取り組みさせる時間に机間指導をすることで，質問しやすい場を設定する。
理科	ワークシート	☆板書との位置関係が一致しているワークシートによる見通しをもたせた学習を進める。 ☆ワークシートの本時の「まとめ」の後に練習問題があり，授業と家庭学習の連動を図る。
	教材ソフト	☆理科ソフトを使い，血液の流れのような，実際は見えないもののイメージを視覚的に捉えさせる。 ☆文字による情報を軽減し，授業の流れをシンプルにする。
音楽	器楽指導	☆リコーダー楽譜に新出の運指を示したものを配付し，奏法を教師がモデリングする。 ★階名記入されている楽譜，または階名+運指図を示した楽譜を選択させることで，練習時間を確保する。
	鑑賞指導	☆批評文を交流させる学習形態の変化で「個：考える→ペア：つなげる→班：高める→全体：広める→個：まとめる」をパターン化する。
美術	制作への意欲喚起	☆上級生の作品を常設展示し，よりよいものを完成させたいという意欲と，作品へのイメージを膨らませる。
	制作進度	☆アイデアスケッチの時間を十分確保する。
保健体育	学習カードの利用	☆生徒一人一人に応じた1時間の活動工程の目標設定を出席番号で板書する。
	模範演技	☆単元の目標を明確化することで，1時間ごとの達成度を意識させ，全員の技能の習得を図る。 ☆授業のパターン化で，活動が始まって教師との距離ができる前に言葉掛けをし，活動やルールの徹底をする。 ☆ダンスにおける模範演技を対面で行う際，教師は左右逆に鏡の動きで指導する。 ★自主練習のためのe-ラーニング教材の作成や，演技直後に動画で自分の動作を確認させてイメージをつかませる。
技術・家庭	ワークシート	☆作業の流れとポイントを示し，1時間の活動内容とゴールを明確にする。 ★机間指導で，補助線を引く等，個に応じて指導・支援の手立てを変える。
	生活との結び付き	☆授業の内容が実生活でそのまま役立つことを掲示し，授業と生活をつなぐ。 ☆イラストとともに示す文字サイズと文字量に強弱を付け，見れば分かる掲示物に工夫する。
外国語	基礎・基本の定着	☆語呂合わせで，教師と生徒が英語の決まりの掛け合いをし，定着を図る。 ★意図的指名で，教師と一緒にリズム読みさせ，定着を図る。
	学習意欲の喚起	☆生徒の発言や活動に対し「OK!」「Good!」「So great!」の言葉掛けや拍手で積極的に肯定的な評価や称賛を行う。 ☆教師の肯定的な評価がモデルとなり，生徒同士のプラスのフィードバックにより全ての生徒に1時間の中で活躍できた実感させる。
学校生活の中		☆学習ルール（聴き方・話し方）を語呂合わせのポスターにして掲示する。 ☆環境整備（ロッカー・靴箱・座席）についてモデル写真にして掲示する。 ☆各掲示物へのタイトルを表示する。

(4) SEL－8Sの視点を取り入れた教科指導

良好な人間関係を意識させる活動等を取り入れる。例えば、授業の話合いや学び合いの場面では、SEL－8Sの取組で身に付けた聴き方や話し方等の社会的能力を活用させたり、関わり合いの態度を意識させたりすることで、教科の授業においても、学習的適応と同時に、対人的適応を促進させる。

2 SEL－8Sの取組の実施

(1) 実施計画

- 期 間 平成27年9月～11月と12月
12月を学習した社会的能力の強化期間とする。
- 対 象 第1学年（64人），第2学年（78人）
第3学年（78人），教師（9人）
- 単元名 「人とのつながりを大切にしよう」
- 指導のねらい
人間関係能力に係る社会的能力と、望ましい人間関係を築いていこうとする態度を育てる。

(2) 研究授業の指導・支援の工夫

小泉（2014）は、SEL－8Sの授業に際してはより個別の評価が望まれると述べている。
本研究においても、事前調査の生徒の自己評価と教師評定の偏差値を基に、社会的能力が低く授業で重点的に指導・支援を向ける生徒と、社会的能力が高く、授業でモデリングの候補となる生徒を把握して座席表を準備する。また、不登校傾向生徒についても座席表に示す。この授業のユニバーサルデザイン化の視点を取り入れた授業を行うことで、個々の生徒をより丁寧に指導することができると考える。これを図8に示す。

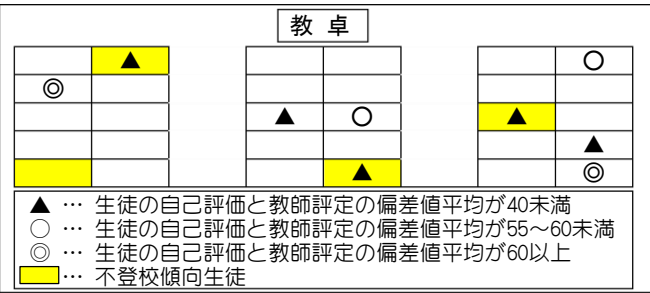


図8 SEL－8Sの授業における座席表（例）

(3) 授業のユニバーサルデザイン化の視点を取り入れたSEL－8Sの取組

学級の全ての生徒に、楽しく分かりやすく学びやすさを実感させる指導・支援の工夫を取り入れる。例えば、授業の導入では、クローズドクエスチョンで挙手をさせたり、ネームプレートを用いて意思表

示をさせたりして授業のスタートをそろえる。展開では、学ぶスキルや態度に係るSEL－8Sのポスターを提示することで、語呂合わせの順に考えればよいよう促す。終末には、学習後に期待される生徒像について教師がまとめ、生徒自身が学習した社会的能力を生活の様々な場面で活用していくことを意識させる。また、ワークシートをカラー印刷することで、記述した生徒の言葉を授業後にそのまま学習成果物として掲示し、友だちの考えに出合わせる学び合いの場とする。これにより、SEL－8Sの取組においても、対人的適応と同時に、学習的適応を促進させる。

(4) SEL－8Sの取組の研究授業の実際

ア 第1時

(7) 学習の展開

第1時「自分の特徴をよく知ろう」では、エゴグラムに取り組んだ。「長所の方程式」を活用して自分の長所を班で交流し、その後、短所を克服するためにできることを考え、ワークシートに記入した。

(イ) ショートエクササイズ

エゴグラムや友だちからのプラスのフィードバックで得た自分の長所、リフレーミングの視点で自身の見方を変えて客観視できたことを基にし、円グラフに自分の特徴の割合を書き込む「自分グラフ」を作成した。

(ウ) 生徒の様子

生徒が記述した振り返りの一部を表5に示す。

表5 ワークシートの記述（一部）

第1学年 「私の長所」	・友だちから自分の長所を言われて自分が知らない自分の良さを知ることができて嬉しかった。 ・自分の特徴を知ること、自分がどんな人なのかを人に伝えるときに役立つと思った。
第2学年 「エゴグラム」	・自分の特徴が分かった。グラフの高いところはマイナスの面が出ないように注意して、低いところはプラスの面を意識して出そうと思う。 ・自分の短所を改めて見直すことができた。昔から変わっていないところも、少しずつ意識して変わっていけることが分かった。
第3学年 「自分グラフ」	・誰かが困っているときや友だちに対して、自分の長所を生かして役に立っていききたいと思う。 ・自分の将来を考えると、夢を見付けることにつながると思うし自分に自信がもてると思う。

イ 第2時

(7) 学習の展開

第2時「はっきり断ろう」「危険な状況での断り方」では、断り方のスキル学習に取り組んだ。実生活を想定しながら七つの「断る」場面カードを使ってロールプレイをし、全員が、断るべき状況における適切な断り方を発表した。ロールプレイに慣れていない生徒がスムーズに活動できるよう、授業の導

入にコミック会話の役割演技をさせたことで、ロールプレイの活動場面では、生徒同士で学習に取り組むことができた。

(イ) ショートエクササイズ

テーマを決めてペアトークする「アサーショントレーニング」を実施した。互いの感想から、相手との距離を考えた声の大きさや目線、言葉遣いや身振り手振り等、適切な自己表現の方法と、相手に分かりやすい伝え方について考えた。

(ウ) 生徒の様子

SEL-8Sの「こわー」「ハリのワニ」のポスターに合わせ、第1学年と第2学年は「こ：断る→わ：ワケを伝える→か：代わりの案を言う」の順に、第3学年は「ハ：はっきり断る→リ：理由を伝える→ワ：話題を変える→ニ：最後は逃げる」の順に断るセリフを考えてワークシートに記述しロールプレイに取り組んだ。内容の一部を表6に示す。

表6 ワークシートの記述（一部）

第1学年 「STOP P⑨」	- こ：ごめん。→わ：長電話しとったら携帯禁止になるからもう切るね。→か：明日学校で聞かせてね。楽しみにしとるね。バイバイ。 - こ：ごめん。→わ：ウチは9時から電話できないルールなんだ。→か：明日また続き話そうや。じゃまたね。
第2学年 「先輩に 断ろう」	- こ：先輩すみません。→わ：係の仕事があるので、クラスで居残りがあります。→か：終わりたいクラブに行きます。 - こ：すみません。→わ：口内炎ができて今日は楽器が吹けません。→か：だから楽譜を見て指番号だけの練習をします。
第3学年 「一緒に タバコ を吸わ ないか」	- ハ：イヤです。→リ：私らまだ未成年だし、そんな興味ありません。→ワ：それよりも昨日のテレビ見た？→ニ：あつ、用事思い出したけえ帰るね。バイバイ。 - ハ：えっ無理。「ダメ。ゼッタイ」と同じだ。→リ：体に害があるしやめろよ。タバコって金かかるしやめられなくなったら大変だ。→ワ：それ以上誘うんだったら、俺らもう友だちじゃない。→ニ：もう帰る。

ウ 第3時

(7) 学習の展開

第3時「学校でのミニボラ」「地域ボランティア」では、学校生活の中のボランティアを見付け、学校や家庭、地域における自分の果たすべき役割と、ボランティアが大切にされている理由を考えた。

(イ) ショートエクササイズ

自分が果たすべき役割を考え、5日間連続して取り組む「今よりも積極的にできそうなこと」を決定し、その他のボランティアと合わせて「ボランティアアポート」として記録を付け続けた。

(ウ) 生徒の様子

生徒が記述した振り返りの一部を表7に示す。

表7 ワークシートの記述（一部）

第1学年 「わたし 発ボラン ティア アパス ポート」	- ボランティアをするといろんな人が「ありがとう」や「助かったよ」と言ってくれて、どんどんボランティアができた。これからも進んでボランティアをしようと思う。 5日間を通して、自分で決めたボランティアも気付いてやってみた「ちょボラ」もよくできたと思う。このパスポートがなくてもボランティアを続けていきたいと思う。
第2学年 「学校行 事もミ ニボラ です」	1年生のときは、合唱で金賞を取りたいという気持ちだったけど、精いっぱい声を出して、クラスのみんなと協力して一生懸命歌うことで、見に来た人に喜んでもらえるし、自分の役割を果たせたかどうかで、自分の成長を確認することができると思う。 - 吹奏楽の発表では、先輩の最後のステージなので、今までの感謝の気持ちを込めて、先輩の支えとなることが自分の役割だと気付いた。
第3学年 「ボラン ティア はなぜ 大切？」	- 自分の思いの押し付けでは、ボランティアとはいわない。喜んですることで、たくさんの人から「ありがとう」を集めたい。 - まだ中学生だから、限られた中でボランティアをするしかないけど、自分のできることを見付けて工夫すれば、小さいことでも大きな成果につながると思う。

エ 第4時

(7) 学習の展開

第4時「私の夢」「夢への挑戦」「自分を見つめて」では、まず、小泉（2011）の示す学校生活を構成する「運動」「芸術」「対人関係」「学習」の四つの分野についての興味や行動をチェックすることにより、得意なものや興味をもっているものを明らかにする。次に、夢の実現や目標の達成の過程で起こり得る困難を予測して、ストレスの対処法について振り返り、教師や友だちの意見を取り入れながら自分に合ったストレスやりくり法について考えた。最後に、自己チェックの結果を話し合うことで、自分の特徴や行動に改めて気付くことができた。

(イ) ショートエクササイズ

夢の実現や目標の達成には、困難な事態にも前向きに対処する方法や気持ちが必要であることを知る「レジリエンスレッスン」と、ストレスは長引かせないことが大切で自分に合った気持ちの切り替え方法を知る「ストレスマネジメント」を実施した。

(ウ) 生徒の様子

SEL-8Sの「リスに」「弁慶のイスさ」のポスターに合わせ、第1学年と第2学年は「リ：生活のリズムを整える→ス：ストレスやりくり法→に：苦手科目の克服」の順に、第3学年は「弁：勉強、特に苦手科目の克服→慶：計画を立てる→イ：家の過ごし方→ス：ストレスやりくり法→さ：支えとなる言葉や人」の順に目標達成のポイントを考えた。生徒が記述したワークシートの一部を表8に示す。

表8 ワークシートの記述（一部）

第1学年 「私の夢」	・自分は将来の夢をまだ決めていないが、興味や得意なことを生かせる職業に就きたいと思う。 ・夢を叶えるためにはどんな方法が自分に合っているのかをよく考えることが大切と分かった。
第2学年 「夢への挑戦」	・リ：早寝早起きをする。→ス：ペットと遊ぶ。→に：数学の提出物を早めに終わらせる。 ・リ：時間を決めてだらだらしない。→ス：ダンス。→に：理科は授業でわからないところは、先生に質問する。
第3学年 「自分を見つめて」	・弁：数学はどんどん問題にあたる。→慶：「今日は～をやる」を決めて勉強しない日をつくらない。→イ：時間設定をしてメリハリを付ける。→ス：好きな音楽を聞いて気持ちの切り替えをする。→さ：「人生が二度あるならこんな険しい道は選ばない。」 ・弁：英語は宿題プラス問題集で解き方のコツを覚える。→慶：平日は3時間30分以上、休日はプラス1時間。→イ：就寝時間は12:00にして、健康に気を付ける。→ス：体力を落とさないためにもジョギングをすることで、ストレスをやりくりする。→さ：本田圭佑選手の「1年後の成功を想像すると、日々の地道な作業に取り組むことができる。」

オ 第5時

(7) 学習の展開

小泉（2011）は、教師以上に日常的に接している友だちによる評価は、生徒の社会的能力に基づく行動の評価として重要な意味をもつと述べている。

第5時「長所を生かそう」の前半は、生徒の学校生活で日常的に見られる行動について、生徒同士の相互評価を行う。後半は、第1時のエゴグラムの結果と比較して、自分のことは自分以外の人からも知ることができることを理解する。

(4) ショートエクササイズ

本時（第5時）の授業後から3週間目の強化期間に、「ほっとH o t ホットメール」を作成した。

(ウ) 生徒の様子

生徒が記述した振り返りの一部を表9に示す。

表9 ワークシートの記述（一部）

第1学年 「長所を生かそう①」	・クラスの中でリーダーとして認められていることが分かった。いろいろな人の意見を聞いてまとめて交流するのに生かしていきたいと思う。 ・クラスの中で、優しい特徴を出せていることが分かった。友だちが悲しんでいたら、声を掛けたり話を聞いたりして安心させてあげたい。
第2学年 「長所を生かそう②」	・勉強も生活も、積極的にしようと思っていたところが、クラスでも発揮できていたのによかった。これからはボランティア活動などで、人のために自分の良さを生かしていきたいと思う。 ・リーダー面が成長していることが分かった。クラスや部活で、困っている人や悩んでいる人がいたら、声を掛けられるようにしたい。
第3学年 「長所を生かそう③」	・自分の特徴の中で、責任感が最も身に付いていることが分かった。将来、何かの役職になったとき、人のせいにせず、自分のやるべきことをきちんとやって迷惑をかけない人になりたい。 ・冷静に気持ちを切り替えられることが自分の強さだと分かった。何か問題が起こったときにも自分の力で乗り越えていこうと思う。

(5) SEL－8Sの取組の強化期間におけるショートエクササイズの実施

研究授業後の3週間を学習したSEL－8Sの能力の強化期間として意図的に設定した。授業で行うショートエクササイズと合わせて、強化期間における三つのショートエクササイズを開発、実施した。

帰りの会の10分程度を使い、学級担任が生徒の日常生活を想定した一場面に取り組みさせる。その際、指導の留意事項に指導者の話す内容としてセリフを示し、学級間での差異を無くした。この指導者のセリフについては、本時の授業のティームティーチングで行う際の学習指導案にも示し、T1とT2の役割を明確化することで個々の生徒への指導・支援の補完とした。強化期間の指導計画を表10に示す。

表10 ショートエクササイズの実施計画

実施期間	ショートエクササイズ	【SEL－8Sの学習領域】 「強化する社会的能力」
11/30 ～ 12/4	① 「はっきり断られたときは」	【問題防止】 「他者への気づき」 「対人関係」 「生活上の問題防止のスキル」
12/7 ～ 12/11	② 「なぜ!? ほっといてくれないの!!」	【進路】 「他者への気づき」 「自己のコントロール」 「人生の重要事態に対処する能力」
12/14 ～ 12/18	③ 「ほっとH o t ホットメール」	【自己・他者への気づき】 「自己のコントロール」 「対人関係」 「人生の重要事態に対処する能力」

ア ショートエクササイズ①「はっきり断られたときは」

「断る」スキル学習の強化として、「断られた」際の状況について考えた。

相手に断られたとき、起こってもいけないことへの不安を感じたり、不満をもったりすることなく相手のことを考えて「断る」という行為を受け入れることは、相手を尊重する態度になることと、「断る」行為を受けたとき、それ以上しつこく誘わないことは、他者との良い関係を維持する上で大切な関わり方であることを強化した。さらに「断る」側にも「理由を述べてははっきり断る」ことの大切さを強化した。

イ ショートエクササイズ②「なぜ!? ほっといてくれないの!!」

逆境体験の多くが人間関係であることを想定し、周囲の人に対する自分の捉え方について考えた。

家族、友だち、先生、先輩や後輩に対し、相手の立場に立つことで、他者の感情や、自分に対してどんな気持ちで関わってくれているかを理解し、相手との関係を適切に対処する能力を強化した。

ウ ショートエクササイズ③「ほっとH o t ホットメール」

身近な人との関わりや支えに対し、良好な人間関係に必要な「感謝」のポジティブ感情を強化するためにメッセージカードを作成した。

他者にしてもらって嬉しかったことを想起させ、感謝の気持ちを伝えることで、互いの尊重と、良好で協力的な人間関係の維持と発展をさせる能力を強化した。

Ⅵ 研究の結果と考察

生徒の学校適応感の事前・事後調査の比較のために、①授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導、②SEL－8Sの取組、③アセスの順に結果を分析し、考察する。

1 授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導における分析と考察

(1) 教師の変容

授業のユニバーサルデザイン化に係る教師の回答の変容を図9に示す。

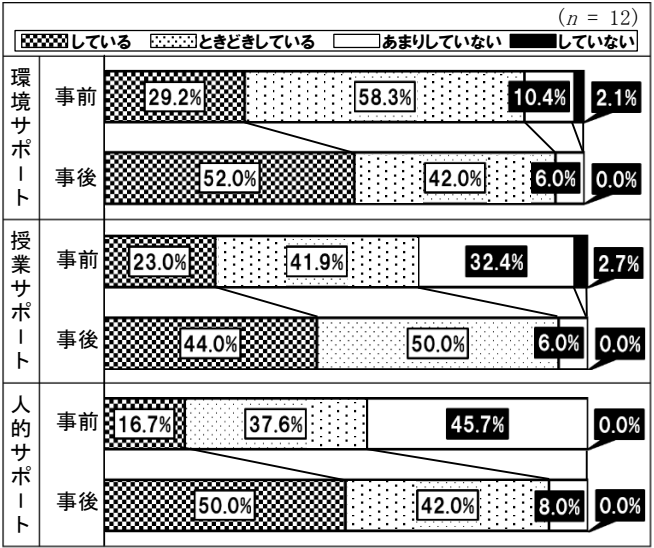


図9 指導・支援に係る教師の回答の変容

授業モデル実施後において、全ての因子で肯定的な回答が90%を超えた。

このことから、教師の授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導における指導・支援が積極的に実施されたことが分かる。

次に、授業のユニバーサルデザイン化に係る教師の事前・事後調査の結果を図10に示す。

授業モデル実施後において、全ての因子で有意な上昇が認められた。

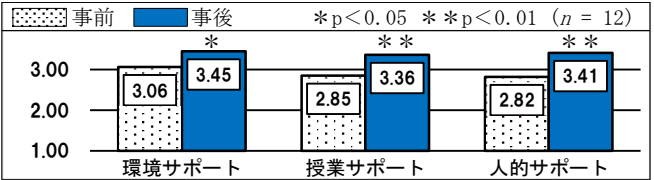


図10 教師の事前・事後調査（回答値）

次に、教師の振り返りを表11に示す。

表11 教師の振り返り

教師	・楽しく、分かりやすい授業のための教材研究が活発になり、よりよい授業づくりになった。 ・教材研究が進み、全ての生徒にとって分かりやすい授業をしようとすることができた。 ・授業づくりを向上させるために、教師自身も専門性を高める意識が強くなった。
生徒	・全ての生徒が見通しをもって授業に参加し、今日の授業では「～がわかった」「～を考えることができた」と実感するようになった。 ・活動や、話し合いに参加しようとする意欲をもたせることができた。 ・「自分にもできるかもしれない」という期待感や安心感を与えることができた。
教師と生徒	・生徒も教師も安心して授業にのぞむことができた。 ・個人からペア、ペアから違うペア、ペアからグループへ、関わり方の形態を変えることで、生徒同士のコミュニケーションがとれた。 ・自分だけでなく仲間と一緒に賢くなろうという意識が高まり、協働学習的な取組としての、小集団の活動が充実してきた。

これらの数値の変容と振り返りから、教師が授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導を行うことは、生徒への適切な指導と必要な支援の方法や態度についての意識を高め、学級の全ての生徒にとって、楽しく分かりやすく学びやすさを実感させるための、教師の具体的な対応として有効であったと考える。

(2) 教師の取組と生徒の変容

授業のユニバーサルデザイン化に係る生徒の事前・事後調査の結果を図11に示す。

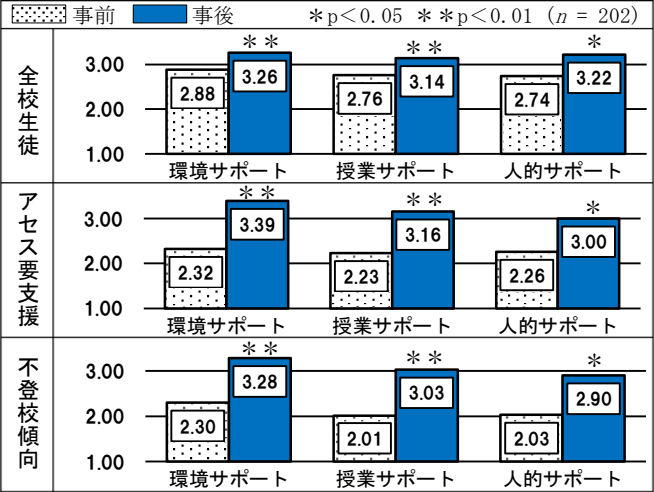


図11 生徒の事前・事後調査（回答値）

授業モデル実施後において、全校生徒、アセス要支援生徒、不登校傾向生徒の全ての因子で有意な上昇が認められた。

これらの数値の変容から、教師が授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導を行うことは、不登校傾向生徒及び学校不適応を起こす可能性のあるアセス要支援生徒を含む全ての生徒にとって、学習がうまくできるようになるための教師からの指導・支援として有効であったと考える。

次に、不登校傾向生徒の「第2学期の授業で頑張ったこと」の振り返りと回答値の変容を表12に示す。

表12 不登校傾向生徒の振り返りと回答値の変容

		回答値の変容 △上昇 ▼低下			振り返り
		環境	授業	人的	
準不登校	A	△	△	△	どの授業でも、集中してノートをとめることを頑張った。
	B	△	△	△	授業で、ノートを分かりやすくまとめることができた。
	C	△	△	△	先生が「ここは大切」と言ったところを集中して聴くことができた。
	D	△	△	△	前よりも、自分なりに落ち着いて授業を受けることができた。
	E	△	△	△	これからもノートやワークシートは、きれいにまとめられたらいいと思った。
	F	△	△	△	人の話を最後までよく聴くことができた。
	G	△	△	△	テストで重要なところに、ノートに目立つ色で分かりやすくまとめることができた。
不登校相当	H	△	△	△	分からないときに先生に質問して、分かるようになり、とても嬉しいと思った。
	I	△	△	△	休憩時間と授業の気持ちを切り替えて、授業をスタートできた。
	J	△	△	△	(無記入)

不登校傾向生徒の回答値は、全ての因子で全員が上昇している。このことから不登校傾向生徒は、学校生活の中心である授業で、教師の授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導を有効に感じ、落ち着いた気持ちで授業にのぞんだり、ノートやワークシートを使って学習の理解をしたりしながら、前向きに活動や作業を進めることができるようになったと考える。

2 SEL－8Sの取組における分析と考察

(1) 研究授業直前・直後の生徒の変容

SEL－8Sの社会的能力に係る全校生徒の研究授業直前・直後調査の結果を図12に示す。

全校生徒では、研究授業実施直後において、全ての因子で上昇が見られ、「自己のコントロール」を除く8因子中7因子では、有意差が認められた。

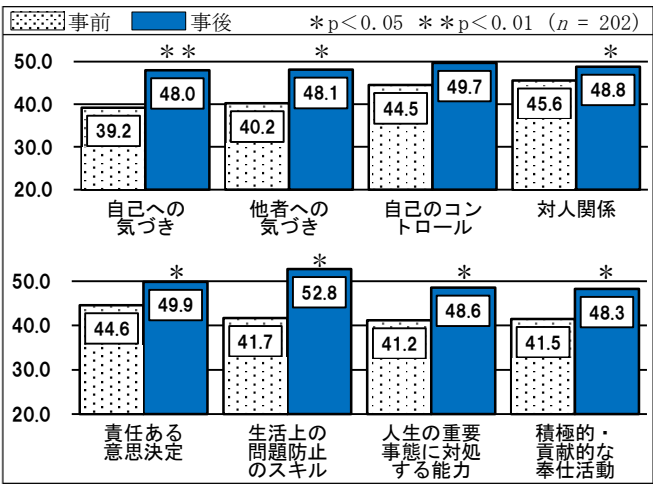


図12 全校生徒の直前・直後調査（偏差値）

次に、SEL－8Sの社会的能力に係るアセス要支援生徒の研究授業直前・直後調査の結果を図13に示す。

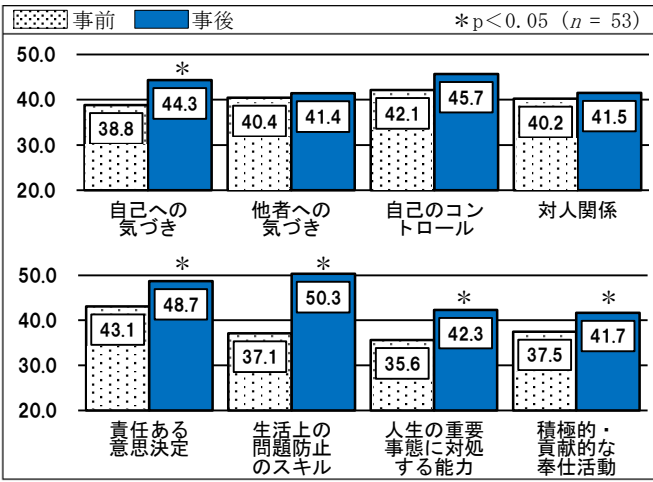


図13 アセス要支援生徒の直前・直後調査（偏差値）

アセス要支援生徒では、研究授業実施直後において、全ての因子で上昇が見られ、8因子中5因子では、有意差が認められた。

次に、SEL－8Sの社会的能力に係る不登校傾向生徒の研究授業直前・直後調査の結果を図14に示す。

平成27年6月の事前調査で対象とした不登校傾向生徒13人に対し、直前9月・直後11月の調査で対象とした不登校傾向生徒は10人である。これは、不登校傾向生徒のうち、第2学期に不登校となった3人の生徒が、SEL－8Sの研究授業への出席が1回以下であることから授業を十分受けていないと考え、SEL－8Sの研究授業の有効性を見取るために、この3人を除く10人の直前・直後調査を比較することとした。

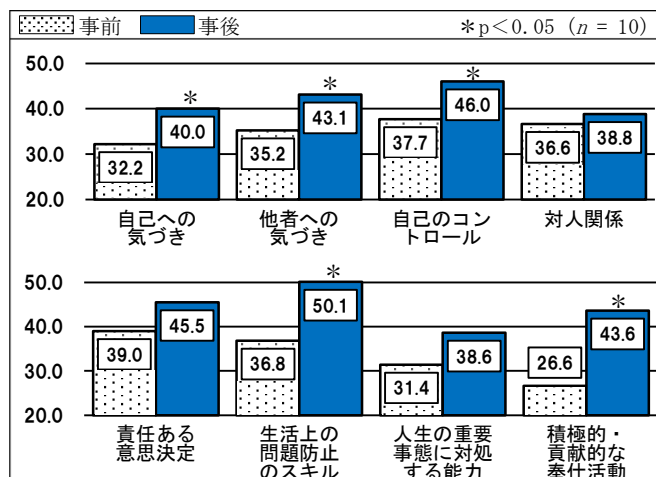


図14 不登校傾向生徒の直前・直後調査（偏差値）

不登校傾向生徒では、研究授業実施直後において全ての因子で上昇が見られ、8因子中5因子で有意差が認められた。

これらの数値の変容から、SEL-8Sの取組は不登校傾向生徒及び学校不適応を起こす可能性のあるアセス要支援生徒を含む全ての生徒にとって、自分の力を発揮しながら、周囲の人々や集団と良好な人間関係や関わりをもつ力を身に付ける学習として有効であったと考える。

次に、不登校傾向生徒のSEL-8Sの取組の振り返りと偏差値の変容を表13に示す。

不登校傾向生徒の「自己への気づき」「生活上の問題防止のスキル」の偏差値は全員上昇していた。このことから、不登校傾向生徒は、自己を見つめる活動や他者からの評価により、人との良好な関係を築いていく上での自分の特徴を理解することができたと考える。しかし、「対人関係」では4人の偏差値に低下が見られた。この社会的能力は、日常生活の多くの場面で要求される力であり、コミュニケーションの基礎をなす力として、自分の思いだけを絶対化せず他者の多様な思いがあることを認め、授業の中で良好な人間関係を築いていこうとする態度やスキルを育てる必要があると考える。

表13 不登校傾向生徒の振り返りと偏差値の変容

社会的能力の偏差値の変容 △上昇 ▼低下 ◇変化なし										振り返り
基礎的					応用的					
自己への気づき	他者への気づき	自己のコントロール	対人関係	責任ある意思決定	生活上の問題防止のスキル	人生の重要事態に対処する能力	積極的・貢献的な奉仕活動			
準不登校	A	△	△	△	△	△	△	△	自分のことも、他の人のことも考えられる人になりたい。	
	B	△	△	△	△	△	△	△	自分のよさを生かして、人に感謝されることをしたい。	
	C	△	△	△	△	△	△	▼	すぐ諦めず粘り強く頑張っても結果が残せる人になりたい。	
	D	△	△	△	▼	△	△	△	(無記入)	
	E	△	△	△	△	△	△	△	これからもちょボラを自分から進んで積極的にしたい。	
	F	△	◇	△	▼	△	△	▼	誰とでも、どんな人とでも仲良くできる人になりたい。	
	G	△	◇	△	▼	▼	△	△	人のために自分から進んで動ける人になりたい。	
不登校相当	H	△	△	△	△	△	△	△	介護福祉士になって、地域の一員として社会に貢献したい。	
	I	△	▼	▼	△	△	△	△	何かあったとき自分を頼ってもらえるようにしておきたい。	
	J	△	▼	▼	▼	▼	△	▼	感情に流されず、自分をコントロールできる人になりたい。	

(2) 教師評定による生徒の社会的能力の変容

学年教師から見た、生徒のSEL-8Sの社会的能力に係る事前・事後調査の結果を図15に示す。

SEL-8Sの取組の、研究授業実施直後において、教師の評価が全学年とも全ての因子で上昇し、直後調査の八角形が外側へ広がった。

また、学年教師間の評定の差が小さくなった。これは、SEL-8Sの取組を学年がそろえて実施することで、生徒を評価する観点が明確になり、基準がそろってきたことによるものと考えられる。

さらに、授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導に取り組んだことにより、生徒の社会的能力に対して積極的に肯定的評価をするように

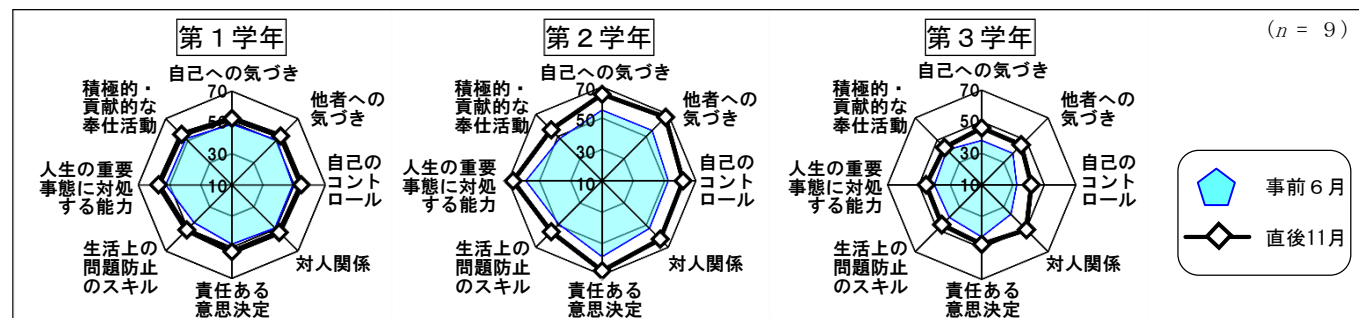


図15 教師評定による生徒の社会的能力の変容（偏差値）

なった教師側の変容が影響していると考える。

次に、SEL－8Sの取組を通して社会的能力を身に付けることでどのような生徒像を期待するか、教師の振り返りを表14に示す。

表14 教師の振り返り

期待する生徒像	・ 他人や自分を大事にする。
	・ 今後の社会の変化に対応し、物、心の両面で、豊かな生活を築くことができる。
	・ リーダーとして社会を引っ張ることができる。
	・ 自分自身をよりよく高め、誰とでも協力して豊かな社会の実現のために貢献する。
	・ 自分も相手も大事な存在として認め合い、明るく豊かな社会の実現のために実行し続けることができる。
	・ どんな事にも、自他のよりよい生活のため社会に貢献する。
	・ 何事にも自分の考えをしっかりともち、冷静に判断し、適切な行動を選択することができる。

これらの教師による生徒の社会的能力に係る評価と振り返りから、教師は良好な人間関係を築くためのスキルや態度を身に付ける学習として、SEL－8Sの取組を有効と感じていることが分かる。これは、SEL－8Sの取組にロールプレイやペア・グループで活動する場面が多く、生徒たちが、カードを使ったり動作化を伴ったりする学習を楽しみながら活動できるよう設定しつつ、効果を上げているからだと考える。言い換えれば、生徒が意欲的に取り組んでいる活動は、教師のねらいとする社会的能力やスキルを習得する活動であり、生徒が楽しみながら自然と身に付けて、目標を達成することのできる学習になっているからと考える。

(3) 強化期間後の生徒の社会的能力の変容

SEL－8Sの社会的能力に係る、生徒の事前6月、直前9月、直後11月、強化後12月の調査の結果を図16に示す。

強化後の社会的能力は、全ての因子において有意な上昇、または偏差値を高めたまま維持していた。

また、SEL－8Sの取組に係る本時の授業は出席できなかったが、帰りの会で行うショートエクササイズには参加し、学級の仲間らと一緒に、同じ活動をすることができた不登校傾向生徒がいた。

これらのことから、ショートエクササイズは生徒にとって取り組みやすく、SEL－8Sの授業と合わせて学習プログラムとして取り入れたことで、社会的能力の強化に、より効果的であったと考える。

3 学校適応感についての分析と考察

アセスによる学校適応感については、「学習的適応」「対人的適応」「生活満足感」の三つの観点で事前・事後調査の結果を示す。

なお、不登校傾向生徒の数値は、研究授業の効果を測定するために、第2学期に新たに不登校となった欠席日数の多い生徒及び質問紙への回答に防衛的反応が見られる欠損値を示す生徒を除いたアンケートを活用している。

(1) 学習的適応の変容

学習的適応について、事前・事後調査の結果を図17に示す。

学習的適応促進のために取り組んだ、授業のユニバーサルデザイン化に係る授業モデル実施の事前・事後調査の結果は、教師生徒ともに全ての因子において有意な上昇が認められた。しかし、アセスにおける学習への適応感の偏差値は上昇したが、有意差が認められて効果が明らかになったのは、第1学年生徒だけであった。次に、第2学年生徒には、有意差は認められないものの上昇が見られたことから、今後も継続して行うことにより、効果を明らかにし

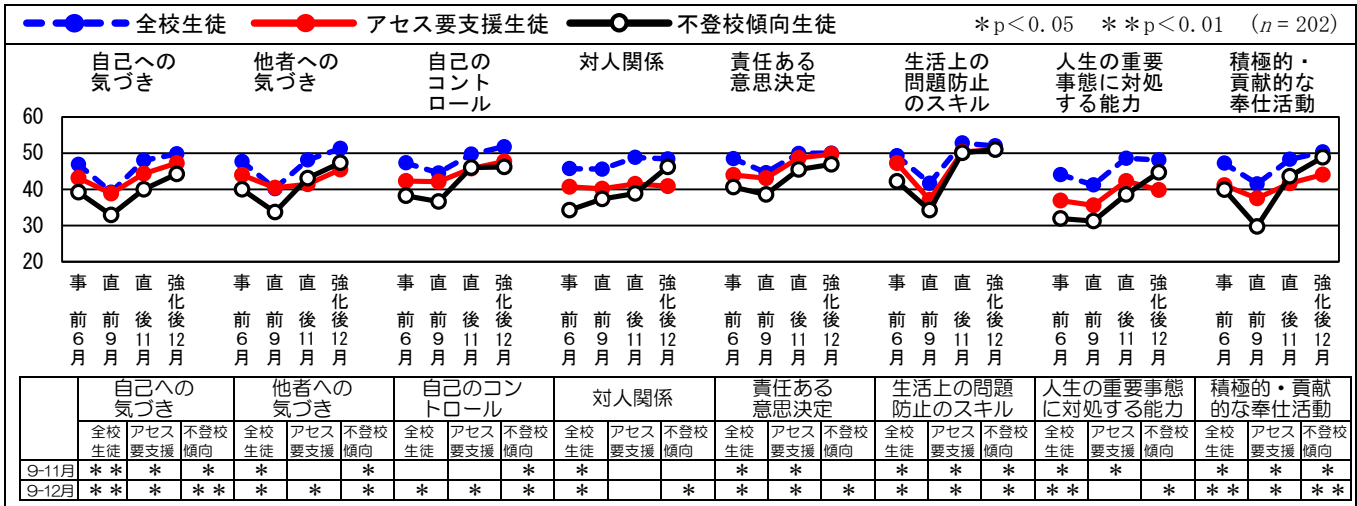


図16 事前6月、直前9月、直後11月、強化後12月の生徒の社会的能力の変容（偏差値）

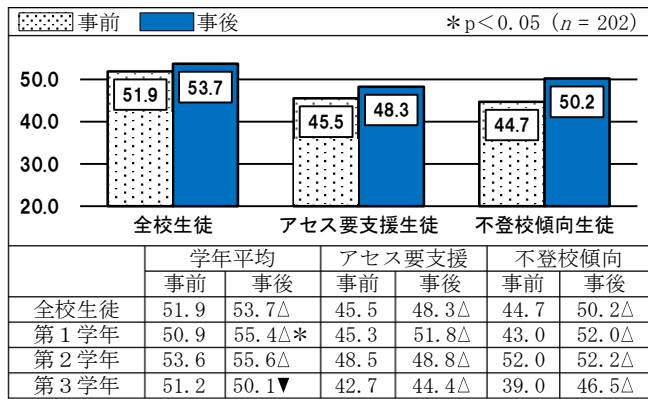


図17 学習的適応の事前・事後調査（偏差値）

ていく必要がある。また、全校生徒のうち第3学年生徒だけが有意差は認められないものの学習に対する満足感が低下していた。これらの授業のユニバーサルデザイン化とアセスの結果のずれについて、教師の聞き取りから、要因として表15のようなことが挙げられた。

表15 教師の聞き取り

教師	・教師が生徒の学習面を評価する際、「提出物が出ていない」等の言葉掛けや関わりが否定的である。 ・生徒全体をほめる場面は増えてきたが、個人個人に応じたほめる場やほめる言葉が少ない。 ・教師が適切な評価をする場面が少ない。生徒の「自分ができているか」「適応しているか」の主観的な感じ方は教師からの評価がないと、生徒自身が自信をもって「できた」と自己評価はできにくい。
	・学習の内容が難しくなったことや、取組の量が増えたことへの不安がある。 ・家庭学習の習慣や自主学習が身に付いてない。 ・第3学年は、進路について本格的な決定の時期に入り、現実の自分の力を自己評価するようになった。 ・第3学年は、本人に対する保護者からの学習面への期待の関わりが多くなり学習の目標値が上がった。

事後調査を実施した11月は、第3学年の希望進路決定時期と重なっていた。この時期の第3学年生徒たちは、自分の能力を数値等から具体的に自己評価するようになり、自分の掲げる学習に対する目標値が高くなる傾向がある。このことから、第3学年生徒の学習的適応因子の低下は、現実的なレベルでの自己評価によるものが関係していると考え。

またアセスの数値の変容について、適切な指導・支援が行き届いた中で、生徒の客観性が育ったことによる低下であれば、指導・支援は継続とされている。

これらのことから、多くの生徒は、中学生期における気持ちの変化が起こる中においても、授業での学習の成果を得ながら、学習への適応を感じて生活していると考え。しかし、不登校傾向生徒及びアセス要支援生徒を含む全ての生徒の学校適応感に係

る学習的適応の促進には、学習内容が難しくなること、進路決定期に起こる不安や緊張を踏まえ、学習方法や学び方を身に付けさせることや、積極的に生徒一人一人への評価や言葉掛けを行うこと等、授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導の工夫や改善をする必要がある。

(2) 対人的適応の変容

対人的適応について、事前・事後調査の結果を図18に示す。

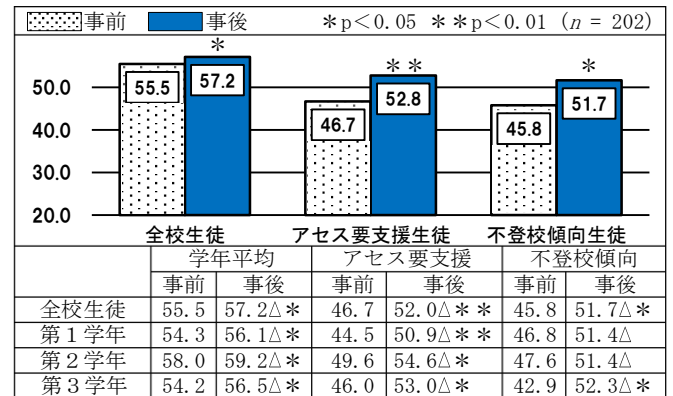


図18 対人的適応の事前・事後調査（偏差値）

全校生徒、アセス要支援生徒、不登校傾向生徒の対人的適応に高まりが見られ、第1学年及び第2学年の不登校傾向生徒を除く全ての生徒に有意な上昇が認められた。

このことから、多くの生徒は、友だちや教師と良好な人間関係を築く中で、学校生活の適応を感じていると考える。

これらのことから、SEL-8Sの取組は不登校傾向生徒及びアセス要支援生徒を含む全ての生徒の学校適応感に係る対人的適応の高まりに効果があったと考える。

(3) 生活満足感の変容

生活満足感について、事前・事後調査の結果を図19に示す。

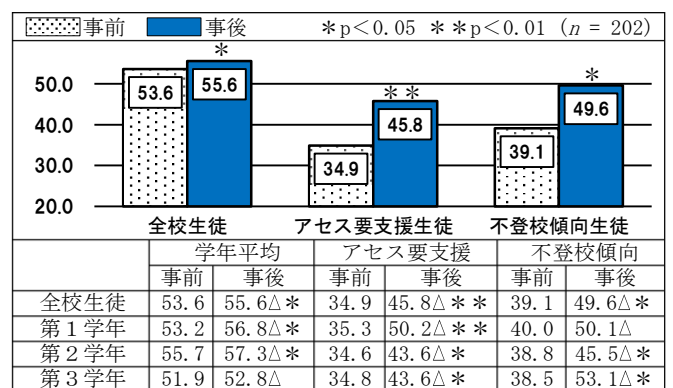


図19 生活満足感の事前・事後調査（偏差値）

全校生徒、アセス要支援生徒、不登校傾向生徒の生活満足感に改善の傾向を示す数値の上昇が見られ第3学年生徒と第1学年不登校傾向生徒を除く全ての生徒に有意な上昇が認められた。

このことから、学習的適応を促進する授業のユニバーサルデザイン化に立った教科指導と対人的適応を促進するSEL－8Sの取組を行う不登校未然防止プログラムは、学習的適応に指導・支援を必要とする生徒と、対人的適応に指導・支援を必要とする生徒の生活満足感の改善に効果があったと考える。

さらに、生活満足感、学校適応感の総合的な因子であることから、不登校未然防止プログラムは、不登校傾向生徒及び学校不適応を起こす可能性のあるアセス要支援生徒を含む全ての生徒の学校適応感の高まりに効果があったと考える。

4 授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導と、SEL－8Sの取組を同時に行う意義

学習的適応促進のために取り組んだ、授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導では、全校生徒の事前・事後調査で全ての因子が有意に上昇した。また、アセスの学習的適応に係る適応感に上昇傾向が確認された。このことから、教師が学校生活の中心である毎日の授業をユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導にすることで、生徒は安心して学習に取り組むことができ、学習的適応が促進されて学校適応感が高まったと考える。

一方、対人的適応促進のために取り組んだSEL－8Sの取組では、全校生徒の事前・事後調査で全ての因子が上昇し、直後には8因子中7因子、強化後には全ての因子で有意な上昇が認められた。また、アセスの対人的適応に係る適応感にも有意な上昇が認められた。このことから、生徒は、SEL－8Sの取組を通して社会的能力を身に付けることで、周囲の人とうまく関わりをもつことができ、対人的適応が促進されて学校適応感が高まったと考える。

さらに、これらの取組を同時に実施したことで、両方の視点を取り入れることとなり、一層効果的に学習的適応と対人的適応が促進されたと考える。

例えば、授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科の授業で、生徒が身に付けたSEL－8Sのスキルや態度を発揮していくことは、友だちとうまく関わることであったり、学習の成果や仲間の頑張りを認め合えたりする良好な人間関係の中で授業が進むので、対人への適応感を実感しながら、学

習的適応の高まりにつながったと考える。教師の行動観察から、班活動では、教え合いや話合いの雰囲気がよくなったという適応状況の変容が見られた。

また、SEL－8Sの取組を授業のユニバーサルデザイン化の視点で行うことは、一部の生徒だけが社会的能力を身に付けるのではなく、学級全体で学ぶことによって、その能力のよさや必要性を共有して習得させることができるので、学級の全ての生徒にとって役立つ学習となり、学習への適応感を感じながら、対人的適応を促進していくことにつながったと考える。教師の行動観察から、授業では発表内容をよく聴き合い、理解しながら全員発表ができたという適応状況が見られた。

このように、学年ごとの学習的適応の違いから、第3学年生徒に時期的な課題が残るものの、第1学年生徒と第2学年生徒の傾向を見ると、学習的適応と対人的適応がより効果的に促進されており、生徒が主観的に学校生活に満足していると感じる学校適応感が高まったと考える。

5 不登校傾向生徒の変容

不登校傾向生徒の変容について、図20に示す。

まず、第1学期不登校傾向生徒のうち、第2学期末までに不登校傾向が改善した生徒は3人、不登校相当から準不登校に改善の傾向に上昇した生徒は1人いた。また、不登校傾向を継続・維持した生徒は準不登校で4人、不登校相当で1人いた。これらの生徒は、不登校未然防止プログラムを十分に受けたことから、学習的適応と対人的適応が同時に促進されて学校適応感が高まったことで、改善または継続・維持したと考える。

次に、不登校傾向の準不登校から不登校相当に悪化した生徒は1人、不登校相当から不登校になった生徒は3人いた。これらの生徒は、第2学期の出席にばらつきがあるため、不登校未然防止プログラムを十分に受けていないことから、学習的適応と対人的適応の促進が不十分と推測される。

また、第2学期に3人の生徒が新たに不登校傾向となった。これらの生徒の事前調査は不登校傾向生徒の特徴である社会的能力の「人生の重要事態に対処する能力」が低いことやアセスの学習と対人の両方に指導・支援のいる生徒であることが分かった。

これらのことから、不登校の未然防止には、不登校傾向となる前に、学習と対人に指導・支援の必要となる生徒に目を向け、不登校未然防止プログラムの第1学期からの実施と継続が必要と考える。

第1学期 不登校 傾向生徒	アセスメント			不登校未然防止プログラム									第2学期					
	アセス			SEL－8Sの取組														
	◆…要支援	▲…偏差 値40未満	研究授業実施期間 SEL－8Sの授業（特別活動） ○…出席 ×…欠席	強化期間 ショートエクササイズ ○…参加 ×…不参加	改善 傾向	準不 登校	不登 校相当	不登 校										
									社会的 能力	① ② ③								
										学習 対人 生活	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	①	②	③
生徒A：準不登校					○	○	○	○	○	○	○	○	○					
生徒B：準不登校	◆	◆	◆		○	○	○	○	○	○	○	○	○		準不 登校			
生徒C：準不登校			◆		○	○	○	○	○	○	○	○	○			不登 校相当		
生徒D：準不登校		◆		▲	○	○	○	○	○	○	○	○	○				不登 校	
生徒E：準不登校		◆	◆	▲	○	○	○	○	○	○	×	○	○					不登 校
生徒F：準不登校	◆	◆	◆	▲	○	○	○	○	×	○	○	○	○					
生徒G：準不登校					○	×	○	×	○	○	×	○	○		不登 校			
生徒H：不登校相当	◆	◆	◆	▲	○	○	○	○	○	○	○	○	○			不登 校		
生徒I：不登校相当			◆		○	○	○	○	○	○	○	○	○				不登 校	
生徒J：不登校相当				▲	×	○	○	○	○	×	○	○	○					不登 校
生徒K：不登校相当	◆	◆	◆	▲	○	×	×	×	×	×	×	×	×					
生徒L：不登校相当	◆	◆		▲	×	×	×	○	×	×	×	×	×		不登 校			
生徒M：不登校相当	◆			▲	×	×	○	×	×	○	○	○	○			不登 校		
				授業のユニバーサルデザイン化 の視点に立った教科指導の実施									不登 校					

図20 不登校傾向生徒の変容

Ⅶ 研究のまとめ

1 研究の成果

- 教師が、授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導を行うことは、生徒の学習的適応を高めることにつながった。特にチェックシートで教師と生徒の両方の立場から実態把握をしたことは、生徒が教師の指導・支援をどう受け止めているかを見直すきっかけとなり、全教科共通の授業モデルの実施において、より具体的な教師の指導・支援に結び付いたと考える。さらに生徒がこれらの教師の働き掛けを有効に感じ安心して授業にのぞんだり、意欲的に取り組んだりするような学習への適応感につながり、学習的適応が促進されて、学校適応感が高まったと考える。
- SEL-8Sの取組を行うことは、生徒の対人的適応の促進に有効であった。特にショートエクササイズを開発し、継続した指導としたことは、学習した社会的能力の強化と定着に結び付いたと考える。また、一部の生徒だけでなく学級の全ての生徒が、ねらいとする能力を共有して身に付けたことから、生徒が適切な自己表現をし、友だちや教師や集団と良好な人間関係や関わりを感じるような対人への適応感につながり、対人的適応が促進されて、学校適応感が高まったと考える。
- 授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導と、SEL-8Sの取組の両方を行うこと、特に同時に実施することで相互の視点を取り入れた取組となり、学習的適応と対人的適応がよ

り効果的に促進された。例えば、生徒は学級全体で良好な人間関係を築くためのスキルや態度を身に付けることができたため、生徒同士が安心して授業に取り組み、これまでよりも互いに認め合う関係の中で学習の成果を実感することが増えた。このように、学校での居心地の良さや居場所を感じられる場面が多くなり、生徒の学校適応感の高まりにつながったと考える。

2 研究の課題

- 本研究で取り組んだ不登校未然防止プログラムにおける生徒の学習的適応に高まりは見られたものの、全ての生徒が主観的に感じる学習に対する適応感には功を奏しなかった。しかし、人的環境が整ったことが確認されたことから、今後は個別にも全体にも、学習の方法や学び方に係る指導・支援に取り組み、学習の結果だけで判断するのではなく、教師の適切な評価や関わり等の工夫や改善を図る必要がある。
- 学校適応感に係る対人的適応の促進に効果は見られたが、不登校傾向生徒については、SEL-8Sの八つの社会的能力がバランスよく高まりつつも、偏差値40～60の平均的な状態を超える結果は見られず定着が十分とはいえない。しかし、本研究で扱ったSEL-8Sの取組に係る指導計画の構成は有効性が示唆されたことから、今後は行事と関連させた学習単元の配列や、不登校傾向となる前の、より早い段階からの継続した実施を踏まえ、1年間を通した取組を進める必要がある。

3 成果と課題を踏まえた次年度への取組

本研究で開発した第2学期実施分の不登校未然防止プログラムは、有効性があることが示唆された。

このプログラムを十分に受けることができた不登校傾向の段階にある生徒への効果が明らかであることから、学習や対人に指導・支援を要する生徒が、不登校傾向状態になる前の、より早い段階からの継続した実施が必要と考え、1年間を通した不登校未然防止プログラムを完成させた。

(1) 授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導

教師は、学級の全ての生徒に「分かった、できた、楽しい」と実感させるために、チェックシートで自らの授業づくりを振り返り、環境サポート・授業サポート・人的サポートについて適切な指導と必要な支援をし、年間を通して学習的適応を促進する取組とする。

(2) SEL-8Sの取組

本研究で実施したSEL-8Sの取組の成果と課題を踏まえた改善点を図21に示す。

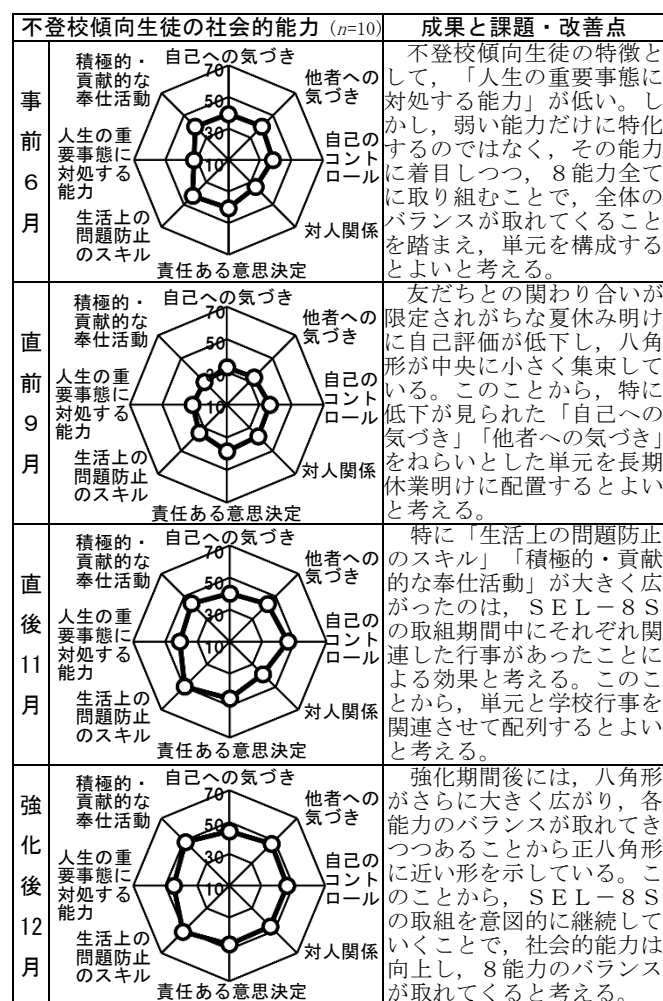


図21 SEL-8Sの取組の成果と課題を踏まえた改善点

これらをSEL-8Sの取組の年間指導計画作成のポイントとして、中学校3学年分の学習計画を作成した。次年度の特別活動の年間指導計画に位置付け、年間を通して対人的適応を促進する取組とする。

終わりに、以上のような、授業のユニバーサルデザイン化の視点に立った教科指導と、SEL-8Sの取組の両方の取組を通して、さらに学習と対人への適応感が促進され、「学校は今日も1日楽しかった。」「明日も学校が楽しみだ。」と、どの生徒も心から感じられるよう、学校適応感を高める不登校の未然防止につなげていきたい。

【注】

- (1) 東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会with小貫悟 (2010) : 『通常学級での特別支援教育のスタンダード自己チェックとユニバーサルデザイン環境の作り方』東京書籍p. 315に詳しい。

【引用文献】

- 1) 国立教育政策研究所 (平成24年) : 『不登校・長期欠席を減らそうとしている教育委員会に役立つ施策に関するQ & A』 p. 10
- 2) 小林正幸 (2009) : 『学校でしかできない不登校支援と未然防止 ―個別支援シートを用いたサポートシステムの構築―』東洋館出版社 p. 6
- 3) 東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会with小貫悟 (2010) : 前掲書 p. 22
- 4) 東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会with小貫悟 (2010) : 前掲書 p. 22

【参考文献】

- 文部科学省 (平成27年) : 『学校基本調査 (確定値)』
 広島県教育委員会 (平成27年) : 『平成26年度の広島県における生徒指導上の諸問題の現状 (速報) について』
 不登校に関する調査研究協力者会議 (平成27年) : 『不登校児童生徒への支援に関する中間報告』
 菅野純 (2008) : 『不登校予防と支援Q&A70』明治図書出版
 国立教育政策研究所 (平成26年) : 『生徒指導リーフ Leaf. 14 不登校の予防』
 栗原慎二・井上弥 (2010) : 『アセスの使い方・活かし方』ほんの森出版
 石井眞治・井上弥・沖林洋平・栗原慎二・神山貴弥 (2009) : 『児童・生徒のための学校環境適応ガイドブック』協同出版
 国立教育政策研究所 (平成20年) : 『適応感を高める高校づくり』
 文部科学省 (平成22年) : 『生徒指導提要』教育図書
 小林正幸 (2013) : 『中学校教師の不登校生徒支援の意識に関する研究 (1)』東京学芸大学教育実践研究支援センター
 小泉令三 (2011) : 『社会性と情動の学習 (SEL-8S) の導入と実践』ミネルヴァ書房
 小泉令三 (2014) : 『一次援助サービスとしての社会性と情動の学習』日本学校心理士会
 小泉令三 (2015) : 『平成27年度児童生徒の社会的能力育成に関するコーディネーター的教員研修会資料』SEL8実践研究会<http://ww1.fukuoka-edu.ac.jp/~koizumi/>